

け や き



学びの積み重ね と 足跡の大切さ

大仙市教育委員会 教育長 三浦 憲一

今年、日本全体が寒く集中的な大雪で、首都圏の雪への対応一つとっても考えさせられました。「あのふわふわ降る雪が、こんなに壁のように積もるんですか」、九州から教育視察に来られた方々の質問でした。確かに子どもの頃は、北日本の大雪は当たり前体操のようなものでしたが、少子高齢化の進展、地域社会・家族の変容、社会的意識の減退、地球規模の課題への対応（環境問題、エネルギー問題）も現実のものとなり、全国的に雪の課題が生じてきております。しかし、秋田は昔から小正月行事は雪の中の祭典ですし、ほのかな灯火に癒されたり、冬を乗り越えようとするたくましいエネルギーも発揮されたりします。私たちは皆成長してきていますが、伸びの積み重ねの実態はなかなか見えないのが実情です。そのプロセス、実態や足跡が一番よく分かるのは、雪ではないでしょうか。雪からも学んでゆきたいものです。

自然条件や社会情勢の変化に迅速に対応していくことはもちろんのこと、様々な課題に対応し、活気ある社会を実現するために、教育行政としても学校はもちろん総合的に幅広い分野と連携し、社会を生き抜く力の養成、より主体的な人材の育成、多様な学習機会の確保、安全で活力ある環境構成などの積み重ねが、一層必要となってきました。

そのような中で、大仙市の児童生徒の学習面や体力面での積み重ねられた安定感、個々や集団というチームワークでの特色ある活躍がたくさん見られました。何といても大曲中学校のマーチングバンド全国大会「最優秀賞」史上初4連覇には感動させられました。テーマについての深い理解、音楽的スキルはもちろん体力面や大編成でのまとまり、どれをとっても目を見張るものがありました。学校や保護者、先輩方、地域の応援、運動部からのエールな

ど、一つの目標に向かったときの総合力のすごさを感じます。

また、秋田県初の大曲南中学校区（大曲西中学校区も参加）で「全国環境教育研究大会」が開催されました。数年間の体験に基づく実践発表や授業公開でし、同様に、西仙北中学校区での小・中連携に基づく国指定の「学力の定着」を目指した授業公開、拠点校方式で高校や中学校、小学校と連携した大曲中学校での「英語授業改善」の公開・・・、多くの方々が全国や県内から視察に見えて、教師の授業の工夫や、主体的な児童生徒の学び合う姿勢に好評価をいただきました。

太田中学校や大曲中学校が始めた東日本大震災復興支援が今では交流活動へと継続しており、中仙中学校や南外中学校区、仙北中学校区、小学校にも拡大し、防災教育では協和中学校や平和中学校区での取組が先進的でした。「生きる力」の育成に向けて、それぞれの学校、地域での確かな学びと活動の積み重ねを実感し、ステップアップしながら着実に前進させたいものです。

「一人で見ると夢は夢でしかない、
一緒に見る夢は現実だ」（オノ ヨウコ）
「力で人を動かさない、心で人を動かす」
（勝 海舟）



第41回 マーチングバンド・カラーガード全国大会（大曲中学校）

被災地交流と避難所開設訓練を通して育てたいもの

大仙市立平和中学校 校長 今井 聡

1 はじめに

昨年度、本校生徒会は「物の支援よりも心の支援を」と岩手県大槌町吉里吉里地区で「大槌・神岡交流グラウンドゴルフ大会」を開催した。

命の大切さ、今生きていることの素晴らしさ、当たり前前のことが当たり前前にできることのありがたさを実感するとともに、あらためて「ふるさと神岡」を見つめ直す機会になった。

2 今回の訓練にたくしたもの

2回目のグラウンドゴルフ大会の開催を考えていた本校が、本事業の避難所開設訓練モデル校の指定を受けた。

そこで、本校は、被災地交流と避難所開設訓練を通して「たくましく生き抜く力」と「他を思いやる心」をもった生徒を育てることを経営の柱に据えた。

日中に災害が発生したとき、働き盛りの大人の多くは別の地域におり、直ちに頼りになるのは、通学区域の広い高校生ではなく中学生である。避難してきた人に居場所や食事を提供し、行政や自主防災組織にその運営を移行するまでの間は、教師と生徒が頑張らなければならない。このことは、被災地を訪れたとき、避難所開設にあたった多くの校長たちから聞いて考えていたことである。

そして、これは被災地を訪れ、被災者の気持ちに触れ、「ふるさとのために何ができるか。」を考えている本校の生徒であるからこそできると考えた。

3 訓練の概要

訓練には、1泊2日の日程で神岡地域の住民、市職員、警察署員、消防署員など約300人が参加。

午後2時30分、西仙北地域を震源とする震度6の直下型の地震が発生。神岡地域の多くの家屋が全壊、または半壊したとの想定で実施。生徒の人員確認と被害状況の報告を受けて、直ちに避難所開設の指示。

総務班 ステージ上に本部を設置。ホワイトボード上に各班の進捗状況を記載し、連絡調整や指示。体育館玄関に受付を設置し、避難住民の名簿を作成。

施設・安全班 地域住民用に柔道用の畳とゴザ、生徒用にマイルディシート（災害避難場所用緊急マット）を敷き、居住スペースを確保。プライバシーを守るためのパーティションを段ボールで設置。

広報班 掲示板に避難状況や日程、各班からの連絡などを随時掲示。一目でわかる避難所の表示は、美術の時間にデザインして準備。

物資班 総合防災課が搬入したタオルケットなどを避難者に配給。給水車から水



を運び、技術科で製作したLEDライトを校内に設置。

給食班 技術科で栽培したジャガイモを使い、240食分のカレーをガスコンロで調理。ご飯は5升炊きの釜を二つ、一斗炊きの移動炊飯器を使って炊飯。



救護班 ビブスを身に付け、受付で記入してもらった健康チェックカードをもとに避難者の健康状態や薬の服用を確認。

保健衛生班 簡易洋式トイレの設置。補充用のバケツの水の運搬。消毒液やウェットティッシュの準備とその後の見廻りとトイレ清掃。

午後5時過ぎ、発電機が始動し、避難所に照明。廊下やトイレ、居住スペースのLEDライトも点灯。少し早い夕食開始。夕食が終わるとテレビもゲームもない長い夜がスタート。未明に急激に冷え込み、職員がストーブを設置。翌朝は、アルファ米と温かいお茶の朝食。午前10時、訓練無事終了。

4 訓練から見えてきたもの

成果

- (1) 被災地交流と避難所開設は、切り離すことのできない貴重な経験であることがわかった。
- (2) 生徒に避難所を開設し、十分に運営する力があることが確認できた。
- (3) 既存の生徒会組織を活用し、避難所の開設・運営にあたり、徐々に行政や自主防災組織に移行していく目途がたった。
- (4) すべての教科等で培ってきた力が総合的に活用できた。
- (5) 避難所生活の苦しさ、つらさに思いをはせ、当たり前前のことが当たり前前にできるありがたさを感じることができた。



課題

- (1) 教育施設である学校は衣食住といった日常生活を送るための機能が備わっているとは言えない。
- (2) 学校には、マイルディシート、タオルケット、毛布、食料等最低限必要なものの備蓄がない。

5 まとめ

この避難所開設訓練を被災地交流とともに、毎年1回は実施し、「絶対に起きてほしくない」その日に備えて地域の力になれる「平中生」に育ててほしいと考えている。また、大人になってからも避難という場面に立ち会ったときに力を発揮できる人になってほしいと願っている。

被災地支援・交流活動

支援から双方向の交流へ

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 佐藤 信夫

3. 11の震災直後、「中学生サミット」として88個のヘルメットを届けることから市内小・中学生による被災地支援がはじまり、翌年には312冊の本を届けた。

そして、今年度は、「ものの支援から心の交流へ」と進展し、被災地の住民や子どもたちとの心と心の交流がますます盛んになってきた。

～今年度の主な被災地との交流活動～

学校名（交流先）	主な活動
大曲中学校 (大船渡市赤崎地区)	<ul style="list-style-type: none"> ・「大曲中と赤崎中を花で飾ろう」 ・地区住民と手作り万国旗を製作 ・仮設住宅の清掃活動と合唱披露
平和中学校 (大槌町吉里吉里地区)	<ul style="list-style-type: none"> ・グラウンドゴルフ大会 ・震災体験者による講話 ・被災地での野外炊飯 ・神岡小からメッセージカード贈呈
中仙中学校 (気仙沼市小原木地区)	<ul style="list-style-type: none"> ・抹茶サービスやロックダウン、アンサンブルの披露等
南外小・中学校 (南三陸町志津川地区)	<ul style="list-style-type: none"> ・震災の体験談を聞く会 ・炊き出し体験と踊りの披露
太田中学校 (大槌町吉里吉里地区 及び和野地区)	<ul style="list-style-type: none"> ・被災地の元校長による講演会 ・「大槌に色彩を届けよう」 ・学校祭への相互招待 ・太田地域3小学校から米とメッセージカード贈呈

キャリア教育を重視したふるさと教育の推進

地域と生き方を学ぶボランティア

大仙市立仙北中学校 教頭 山本 暢三

本校では全国的に有名な払田柵や、東北三大地主といわれた池田氏の旧池田氏庭園を中心にふるさとを学び、伝え、広めることができる人材育成を目指している。生徒会が中心となって行っているボランティア活動のほかに、払田柵で行なう「彩夏せんぼく」の平安行列に1年生、秋の旧池田氏庭園公開に2年生、地域の施設交流体験に3年生が参加するという、3年間を見通した計画に基づいて取り組んでいる。

特に旧池田氏庭園公開においては、3,000人を超える全国からの来場者に対して、ガイドをはじめ公開のお手伝いをしながら、人と積極的に関わり、共に汗する活動等を通し、地域の方々の考えや生き方、自分たちに対する期待を肌で感じることができている。

さらに、「問いを発する生徒の育成」と「言語活動の充実」を基本に据えた授業実践で身に付けた力を活用し、自分の考えをまとめ、伝える力を確認する場もなっている。そして、それが更なる学習意欲の高まりと、主体的な学びを生み出している。

ふるさとを愛し、ふるさとの伝統を引き継ぐ者と、世界に羽ばたき、ふるさとのよさを紹介する者たちが、確実に育っていることを感じている。



被災地支援・交流活動

南三陸町で笑顔の花を咲かせよう

大仙市立南外中学校 教諭 佐々木 勝利

今年度本校は、宮城県南三陸町の志津川小・中学校や仮設住民との交流活動を行った。南外小学校の学習田で作られた新米30kgを志津川小学校へ届け、炊き出し体験として仮設の方々や新米のおにぎり、きりたんぼ鍋、はっと（南三陸町の地元料理）を一緒に作り、秋田と宮城の食を通じた交流になった。志津川中学校へは、文化祭や古紙回収で得た収益金と全校生徒のメッセージを届けた。その際、志津川中学校でも踊っている「ヨサコイ」を見たいと希望が出され、全校生徒の前で踊りを披露するという思わぬ交流も実現した。



アンコールの声がわき上がり大変な盛り上がりとなった交流に、仮設住宅から見ていた住民の方々も涙を流して拍手をおくってくれた。思いやりという道徳的価値を肌で感じた1日となった。

後日、現地を視察した大仙市長さんが、仮設の集會場でボロボロになるまで感想文集が読まれていたことに感動したということを知り、感慨を新たにしました。

ふるさと生活体験推進事業（市教育委員会）

大好き大仙～ひと・もの・自然

大仙市立西仙北小学校 教頭 竹村 尚人

平成25年度「ふるさと生活体験推進事業」に、本校の5年生17名が1泊2日の日程で参加し、次のような体験を行った。

1 実施した体験活動

- 1日目（8月7日）
 - ・飼育動物との触れ合い体験
 - ・フィールドワークと自然遊び
 - ・夏野菜の収穫体験
 - ・収穫野菜を使った夕食づくり
- 2日目（8月8日）
 - ・昼食用のおにぎりづくり
 - ・花火工場見学



2 児童の様子と成果

1日目の「百笑村」では、家畜や身近な動物と触れ合ったり、里山の手作りアスレチックを楽しんだり、豊かな自然を満喫した。また、ナスやキュウリ、スイカなどの収穫体験を通して農家の方々との心の交流ができた。2日目の花火工場では、花火づくりの工程や色の出し方の工夫などに興味津々だった。子どもたちはこのような活動を通して、関わった方々の温かさやもの作りの工夫や苦勞、そして豊かな自然に触れ、ふるさと大仙のよさやすばらしさを改めて実感する機会となった。

「教育課程研究指定校」事業（市教育委員会）

「読んで分かる」授業をめざして

大仙市立四ツ屋小学校 教諭 今野 靖子

1 はじめに

今年度本校は、大仙市教育委員会教育課程研究指定校事業の指定を受け、「読解力を身に付けた子どもの育成～目的に応じて読むことの指導の工夫を通して～」を研究主題とし、研究実践を進めてきた。

2 研究の概要

【課題】

- ・読解力、特に目的に応じて必要な情報を取り出し、それらに関連付けて読むこと

【研究の重点】

- (ア) 言語活動の充実
- (イ) 国語学習の単元構成や教材の工夫
- (ウ) 読み取るスキルを身に付けさせる工夫



【主な実践】

- 読み取ったことを基に子ども同士が関わり合って学習を深める学習形態の工夫
 - ・個→ペア、グループ→全体→個
 - ・ホワイトボード、黒板、写真等の活用
- 子どもが主体的に学習計画を立てるオリエンテーションの設定
 - ・相手意識・目的意識を大切に単元の導入
 - ・学習のゴールまでに必要な時間や順序を話し合う時間の設定
- 単元終末における学習活動の到達状況を子ども自身が描けるような単元計画の立案
 - ・学習のゴールが見える単元計画の作成
 - ・学習のゴールを具体的に描くことができるような到達状況の例示
- 発達の段階に応じた読み取りスキルの作成
 - ・説明文と物語文の読み取りスキル「学び方ポイント」と読み取った姿を明示した表を授業で活用

3 まとめ

【成果】

学習形態の工夫を図り、積み重ねてきたことや、単元の終末における学習活動の到達状況を示すことで、子どもたちは見通しをもって学習に取り組むことができおり、主体的な学びにつながっている。

【課題】

読み取ったことを基にして、子ども同士の関わりを大事にした学び合いを設定したが、深まりが十分ではなかった。ねらいに迫るための学び合いについては、更に検討が必要である。また、単元や授業の中で言語活動を適切に位置付け、更に充実させることで、子どもたちの読解力の育成を図っていく必要がある。



「確かな学力の育成に係る実践的研究」(文部科学省)

「学び合い」を柱とした研究を通して

大仙市立西仙北中学校 教諭 今野 悦子

今年度は、昨年度に引き続き西仙北小学校との連携を軸に、全教職員が四つの班（授業研究、表現力、キャリア教育、家庭学習）に分かれて研究を進め（にしせんプロジェクト）、11月14日には「学び合いによる確かな学力の育成～小・中連携と授業デザインの工夫～」をテーマに、国語、算数・数学、図工・美術で小・中自主公開研究会を行った。全国から約160名の参加者を得て、「学び合いによる生徒主体の授業」「授業デザインを通じた小・中連携」「生徒を引きつける課題提示や生徒をつなぐ工夫」「学び合いによる学級づくり」等が評価された。一方、「生徒のつぶやきを拾う工夫」「生徒の実態を考慮した学び合いの更なる工夫や授業時間の配分」「共通事項の視点を取り入れた学び合いの工夫」等の課題も出された。

2年間の研究指定を通し、「学び合い」を授業づくりの基本に据えることで人間関係が円滑になり、学習意欲が向上し、家庭学習の質・量が充実したことなどが成果としてあげられる。今後も、よりよい生徒の姿を目指し、小・中連携を軸とし「学び合い」を柱とした教育活動を更に充実させていきたい。



「拠点校・協力校英語授業改善プログラム」事業（文部科学省）

自分のことばで思いを語ることを目指して

大仙市立大曲中学校 教諭 鈴木 康子

協力校：大仙市立大曲西中学校・大曲市立大曲南中学校
大仙市立大曲小学校・秋田県立大曲農業高等学校

昨年度の「『読むこと』と関連付けた言語活動の充実」をねらいとした取組に加え、今年度はさらにCAN-DOリストを見直ししながら授業改善に取り組んだ。

1 今年度の主な取組

- ①「A B C Dプレゼンテーション」～話形の定着
四つの要素で構成するフォーマット（基本話形）を用いて生徒がメモを作成し、自分の経験と結び付けて話す活動を積み重ねた。
- ②「スピーキングテスト」

CAN-DOリストと連動させながら、スピーキングテストにより考えを伝える力の定着を図った。更に、生徒が話した内容に関わる質問を行い、理解を深めた。

2 成果と課題

アンケート結果から、生徒は、考えを伝える「橋渡し」としての話形を身に付けることで、英語を話す力が身に付いてきたことを実感し、話すことをより楽しむようになってきている。

また、CAN-DOリストを活用することで、英語科の教員が同じスタンスで、生徒の英語力の向上を意識して指導することができた。生徒が、自分のことばで思いを語る姿を目指し、今後も研修を積み重ねたい。



環境教育に関する取組を活用した調査研究 (文部科学省)

第45回全国小中学校環境教育研究大会 秋田大会を終えて

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 島田 智

1 はじめに

本市では平成22年度から、文部科学省の「環境教育に関する取組を活用した調査研究」の指定を受け、大曲南地区と大曲西地区の小・中学校6校を実践協力校として取り組んできた。今年度は、11月29日(金)に、本市において第45回全国小中学校環境教育研究大会秋田大会が開催された。

2 公開授業

午前は、「小・中・地域の連携を通して未来につなぐ環境教育～E S Dの視点に立ったカリキュラムの実践を通して～」を研究主題として公開授業が行われた。食や環境問題等を取り上げ、子どもたちにとって身近な問題が課題意識を高め、意欲的に取り組む姿が見られた。また、子どもたちが関わり合っ



3 研究成果

この研究大会を通して、研究主題「環境教育によって育む学力と環境保全意欲」についての成果を、これまでの取組と児童生徒の姿で、全国に向けて発信することができたものとする。全国各地からの参加者からは、「子どもたちが自分の考えをしっかりとって授業に臨んでいる」、「体験に裏付けられた知識や技能がしっかりと身に付いている」、「自分たちの地域の未来について真剣に考えている姿に感動した」、「秋田県の学力が高い理由が分かったような気がする」等の感想が寄せられた。E S Dの視点に立つて、年間指導計画や単元計画及び授業を構成することが、市で目指している「総合的な学力」の育成につながっているという確かな手ごたえを感じることができた。

4 全体会

午後は、市民会館に会場を移し、文部科学省、環境省、国土交通省等からの来賓を迎えて全体会が行われた。全国からの3例の実践発表の後、秋田県出身の水中写真家中村征夫氏の講演「命めぐる海からのメッセージ」で大会の幕を閉じた。



今後は、各校において、ますます重要視されるであろうE S Dのねらいを具体化し、教育課程に適切に位置付けて取り組んでいくことが期待されている。

地域と連携した特色ある活動

地域を駆ける思い!

大仙市立南外小学校 校長 小西 肇



学校統合を機会に、地域活性化協議会、南外支所・公民館、そして各地区自治会の皆さんが中心となって行った南外地域運動会。昨年、8年ぶりに復活し、今年で2回目。特に今回は、小学校の運動会との合同開催とし、小学生種目を減らさないよう配慮して実施した。また、連携を進めている南外中学校の生徒も参加し、補助員を積極的に引き受けてくれた。

9月1日。前日からの雨で開催が危ぶまれたが、春からの整備のおかげで、朝6時のグラウンドには水たまりが全く無い状態であった。そして、6時半には開催を知らせる花火、7時には各地域のテントが勢揃いしていた。統合し、「おらほの学校」という意識が薄れたのではという心配をよそに、地域住民の半数、約1,700人がグラウンドに集結した。

開かれた学校、そして、子どもたちの活躍を地域に示すという意味で、地域住民と同じ時を同じ場所で過ごせたことに意義があったと思う。人々の思いがグラウンドを駆け抜けた1日となった。



学校支援地域本部事業 (文部科学省)

1 + 1 = 700 + α

大仙市立神岡小学校 校長 沢屋 隆世

統合2年目の本校の特色は、旧神宮寺小学校と旧北神小学校の二つの学区を一つ(1 + 1)にした「神岡全域の教育力を生かした神岡小学校学校支援地域本部」があることだ。



今年度は、新たに北檜岡の鈴木三郎さんにコーディネーターをお願いし、地域の様々な人材との橋渡しをしていただいた。エリアが広がったことで、これまでの地域支援本部の人材が、自然や農業を中心にさらに広がり、子どもたちの学習において「まるごと神岡」にどっぷりと浸ることができる環境が整ってきた。12月には、日頃の支援に対する感謝を伝える「ふれあいサンデー」を開催した。昨年度と比べて100人以上も多い、700を超える家族や地域の方々が来校し、餅つきや昔遊びなどを通して子どもたちと触れ合うことができた。

今後もこの事業をさらに広げ、学校の応援団を一人でも多く(+α)お願いし、地域の学校として信頼される関係をつくっていききたい。



コロンブスの卵わくわくサイエンス事業 (市教育委員会)

科学はおもしろい！

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 島田 智

本事業は、“理数教育の充実”を図るため、教職員対象の「観察・実験授業スキルアップ出前研修」と、中学生対象の「中学生首都圏大学・総合研究所派遣」の二つの研修を実施した。

1 観察・実験授業スキルアップ出前研修

千田文和先生を講師とし、児童生徒の知的好奇心を高める理科の授業づくりを目指して、「観察・実験を通して科学への疑問について気付き、考え、実感できる授業づくり」をテーマに、理科教員の指導力向上を図る研修を実施した。



全12回の研修に、延べ170名の教員が参加し、日頃の指導上の悩みや課題となっている単元について研修を深めた。身近なものを応用した器具を使つての実験等は、実践的な研修につながり、参加者からは「理科の楽しさを十分味わうことができた」「すぐに役立つ内容で授業で有効に活用したい」「わくわくする研修だった」等の、研修の充実を実感した感想が多く寄せられた。

2 大仙市中学生首都圏大学・総合研究所派遣

7月31日(水)～8月1日(木)の期間に、中学生18名が参加して実施された。

1日目は、日本科学未来館で一般展示を見学した後、全員で超伝導の実験を体験した。2日目は、2コースに分かれての研修であった。千葉大学医学部コースでは、細菌学の世界的権威である野田公俊教授が、特別講座を開講してくださった上に、大学病院の検査システムも見学させてくださった。つくば市コースでは、宇宙航空研究機構



(JAXA) 筑波宇宙センターで、最新の日本の宇宙開発について学んだ。生徒たちは、数日後に目の前にあるH II-Bロケットで、国際宇宙ステーション (ISS) に向けて補給船「こうのとり」が打ち上げられることを知り、興奮を隠せないようだった。

世界最先端の研究施設で、日本の科学技術や研究レベルの高さを直接膚で感じ取ることができた生徒たちは、「改めて科学の難しさ、大変さ、奥深さ、楽しさ、面白さをを知ることができた」「将来、宇宙開発利用に関わる仕事をしたいという気持ちが一層強くなった」などの感想を寄せている。今回の参加者の中から、将来優秀な科学者が生まれ、世界の科学を牽引することを期待したい。

生徒一人一人の報告書は大仙市教育委員会ホームページで

大仙市中学生サミット (市教育委員会)

大仙市の未来は私たちがつくる

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 島田 智

平成19年から開催されている大仙市中学生サミットは、今年度、西仙北中学校、協和中学校、平和中学校、南外中学校が事務局校となり、「REVOプロジェクト」を継承しながら、「未来の大仙市を考える」をテーマとして取り組んだ。

8月21日(水)に大曲中学校を会場として行われた第11回大仙市中学生サミットでは、今年度も有志の小学生が参加して、「未来の大仙市を設計しよう！」というワークショップを行った。各グループからは「街全体を透明なドーム型ソーラーパネルで覆う」「道路を発電機とし、車の振動や地震で発電する」「排気ガスを酸素に変える技術を開発する」等のユニークなアイデアが出された。参加した児童生徒は、「自分たちが未来についてきちんと考えていかなければならないことを改めて感じた」「日本の未来を背負っているのは自分なんだと自覚できた」等の感想をもった。講師の松塚智宏さん(建築士)からは「大切なのは『思い』。『思いやる心=エコな心』を大切に、未来を考える人になってほしい」というメッセージをいただいた。



大仙市中学生議会

未来の大仙市の担い手として

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 佐藤 信夫



「私たちにできる新たな取組を考えて、それを自主的に実践していきたい」と議長が締めくくった。質問を考えるために市の事業や取組を学び、具体的な改善策を提案する中で、中学生は改めてふるさと大仙を見つめた。そして当日、そんな中学生の思いに誠意をもって応えていこうとする市長や副市長、教育長、各部長の姿に彼らは驚き、感動した。

「少子高齢化」「雇用の創出」「グローバル化」「環境保全」「通学路の安全」「共生社会」等、鋭い切口で課題意識を高めた中学生たちは、ふるさとのために自分たちでできることを「考えた」。このきっかけが、各中学校での主体的な実践へとつながり、市内全域に広がることを期待したい。



～ 大仙市中学生議会宣言 ～

私たち大仙市の中学生は、未来をつくる担い手としてこの自然豊かな美しい大仙を守り、若者とお年寄りが手を取り合って共に生き、笑顔あふれる明るいまちを創造していくことを誓います。

大仙市立中学校生徒海外派遣事業 (市教育委員会)

ようこそ！オーストラリアへ

大仙市教育委員会教育研究所 CIR マイルズ・ニール

生徒一人一人の報告書は大仙市教育委員会ホームページで

ムシムシした1月7日の夜、熱帯雨林の中のあるロッジの広場で、大仙市の中学生20人が汗だくで踊っていた。そして地域の高校生やロッジのスタッフも一緒になり、全員が一心同体となって楽しそうに踊っていた。国籍、母国語、文化などを超え、皆が仲間になった瞬間だった。

1月3日から9日まで、その中学生たちは僕の故郷であるオーストラリアの東北地域へ行き、4日間農家に泊まって、農業、自然、文化などについて学んだ。今年、オーストラリアの夏は猛暑で、35℃を超える日々は真冬の仙から来た中学生たちにとってつらそうだった。また、虫の多さや大きさなど、オーストラリア独特の環境にびっくりしていたが、すぐに慣れ、生き生きと活動する姿が見られた。ファームステイの家族と別れる時には、ぼろぼろ涙を流し、充実した6日間だったことが伺えた。

僕は16歳の時に、神戸市の高校に2か月間留学し、その経験が僕の人生に大きな影響を与えた。この中学生たちも海外派遣の経験が、今後の生き方につながることを期待したい。



「大仙っ子 読書の日」に係る取組事例

**本となかよし！図書館大好き！
よりよい図書館経営を目指して**

大仙市立豊川小学校 教諭 築 容子

本校では昨年度、大曲仙北教育研究会の図書館教育研究の指定を受けたことをきっかけに、次のような図書館経営の見直しや改善等に取り組んできた。

(1)図書ボランティアや支援サポーターによる読み聞かせの開始

今年度は、ABSアナウンサーによる読み聞かせを行い、子どもたちの「読み聞かせ」への関心が一気に高まった。

(2)学校図書館の充実

図書のバーコード化、本棚の配置や本の展示の工夫、ソファ等の設置で居心地のよい明るい空間へと変わり、図書館を利用する児童が大幅に増えた。



(3)図書を利用した全校集会の開催

「大仙っ子読書の日」の取組の一環として、全校集会を開いた。「ぼくたちなぞとき探偵団」と題してクイズラリーを行い、本のよさや楽しさが実感できる時間となった。

この2年間で子どもたちの読書への関心は確実に高まった。また、全職員が関わったことも意義のあることである。今後も「通いたくなる図書館」づくりに、学校一体となって取り組んでいきたい。

国際教養大学AIUとの異文化交流事業

世界に羽ばたく大仙っ子

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 高橋 規子



「とても単純なのだが、大仙市内の子どもたちには、外国人と会っても物怖じせず交流できる人に育ってほしくてね。」市長のこのような思いに支えられて始まった本事業は、今年度で5年目を迎える。今年度は、小学校17校(延べ28回)、中学校8校(延べ9回)がこの事業を活用し、子どもたちの発達の段階にふさわしい交流活動を行った。

交流のスタイルとしては、国際教養大学の留学生をゲストやオブザーバーとしてではなく、子どもたちと共に活動を楽しめるようにするのが主流である。小学校では、英語コミュニケーション能力が完璧でなくても、心と体で感じ合えるような指導を工夫している。

また、中学校では、英語科の授業に活用するだけでなく、国内外から志をもってこの大学に来ている学生の話聞く機会を設定するなど、キャリア教育の視点からこの事業を活用する学校も増えてきている。

今後も、各校の知恵と創意に基づいたこの事業の活用を期待するとともに、大仙市の子どもたちの将来につながる力が育まれることを願っている。



心のプロジェクト「夢の教室」(市教育委員会)

「思い」に支えられて

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 高橋 規子

スポーツ、図工、音楽の三分野の「その道のプロ」から聞く話、毎回どの学校の子どもたちも真剣な眼差しを向ける。今年度は、音楽分野で小学校7校と中学校4校、図工分野では小学校4校、スポーツ分野では枠を中学校にまで広げ、小学校3校と中学校2校での開催となった。中学生にとっては、ゲームを通してチームワークの大切さを体感したり、プロになるまでの体験談を聞くことで自分自身を見つめたりする貴重な機会になったようである。

図工分野は、PTA授業参観として行った学校があった。「親子で一緒に芸術作品に触れたり、協力して物作りに取り組む機会を作りたい」という学校の思いに講師も賛同し、保護者からも好評だったようである。

音楽分野でも、「域内の小学校の連携のスタート事業として、4年生が活用させてもらうことはできないだろうか…」という学校側の要望に講師が快く応じ、心温まる夢の教室が開催された。

このように、学校オリジナルの「思い」に支えられた夢の教室こそが、自分のよさを発信し社会貢献していける子どもの育成を、大きく支えていると感じている。



大仙市PTA連合会

PTA連合会の役割

大仙市PTA連合会会長 齋藤 靖

大仙市PTA連合会も発足して6年目を迎え、活動も順調に進んでいる。今年度もあいさつ運動、ノー



メディアデー、ノーゲームデーの実施、秋田ノーザンハピネットのテクニカルディレクターである長谷川誠氏をお招きしての講演会、「幼・保・

小・中及び地域連携による学校経営の取組」として、太田南小学校で行われた視察研修会、母親委員会の交流会等、充実した活動を展開することができた。また、各校ともいじめ問題等のそれぞれの課題について工夫を凝らした取組を行い、成果が目に見えるようになってきている。そのような情報を連合会としても共有し、情報交換していきたいと思う。

今後も幼・保・小・中の縦の関係、隣接する他校との横の関係を密にしながら、あいさつ運動やノーメディアデーなど、各校ごとに工夫している事業のレベルアップや新たな取組にも挑戦してもらいたいと思う。



第2回教職員研究集会 全体会フォーラム

「体系的な取組による
キャリア教育の充実のために」

～校種間(小・中・高)、家庭、地域とのつながりを通して～

大仙市教育委員会 教育研究所長 須田 百合子

夏の研究集会のテーマは「キャリア教育」であった。このフォーラムでは、小・中学校の教諭、高等学校の教諭、そして社会人がパネリストとなり、それぞれの立場でキャリア教育についての実践発表や意見交換が行われた。

大曲農業高等学校の柴田満美子教諭からは、「高等学校におけるキャリア教育の現状と課題」についての発表があり、小・中学校の実践が高等学校にどうつながっているのか、また、高等学校で目指す生徒の姿について理解することができた。

また、秋田清酒株式会社の佐々木朋子さんからは、国際教養大学のカリキュラムや在学中の体験、現在の仕事について講話をいただいた。特に、グローバルな視点をもつためには地域を大事にすること、地域から世界へ発信していくことの重要性が熱く語られた。各学校種におけるキャリア教育は、互いの取組を理解し、前後のつながりを考えて実践することでより充実したものになる。市の教職員にとって、視野を広げる貴重な機会となった。



はいさい・めんそーれ 沖縄・大仙子ども交流事業(市教育委員会)
(こんにちは) (ようこそ)

文化の交流から心の交流に

(糸満市教育委員会「学びの体験事業」の受け入れ)

大仙市教育委員会 教育研究所長 須田 百合子

10月22日(火)から24日(木)までの3日間、糸満市教育委員会の「学びの体験事業」が実施され、本市教育委員会はその際の交流活動を「はいさい・めんそーれ 沖縄・大仙子ども交流事業」で支援した。



糸満市からは、小学生20名、中学生16名に教員等16名が訪れ、西仙北小学校と西仙北中学校で授業や生活を体験し、交流を深めた。

小学校の授業では、糸満市の子どもたちのすばらしい発表が授業を盛り上げた。中学校では、合唱コンクールに向けた練習で、一体感を感じることができたようだ。



交流活動では、小・中学校共に郷土料理を一緒に作って味わった。沖縄の「ミミガー」と秋田の「だまこ汁」は、どちらも好評でお代わりが続出した。食を通して更に絆が深まった。

沖縄に戻った糸満市のある中学生が、同じ時間を共に過ごした西仙北中学校の生徒一人一人に、メッセージ付きの手作りお菓子を贈ってくれた。この3日間で、互いの文化の違いに刺激を受けたことはもちろんであるが、心の交流が深まったことが大きな成果である。

平成25年度 教育研究所のあゆみ

1 大仙市教職員研究集会

①第1回大仙市教職員研究集会(H25.4.26)

□教育長講話 □特色ある取組発表

②第2回大仙市教職員研究集会(H25.8.9)

□職務別等研修会(午前)

○生徒指導主事研修会

○特別支援教育支援充実研修会

○教科研修会(社会)

□全体会(午後)

○実践発表

(小・中・高等学校におけるキャリア教育)

○フォーラム(講話とパネルディスカッション)

2 学校訪問

①教育委員等訪問…市教育委員会や各学校の教育方針等の共通理解

②教育長等訪問…学力向上、「総合的な学力」の育成、生徒指導上の課題への対応等について状況を把握し、改善の手立てなどを確認

3 学力向上

○全国や県の学習状況調査の分析結果を提供

○学力向上推進委員会の活動として、国や県の学習状況調査分析結果に基づいたフォローアップシート等の作成と提供

発行 大仙市教育研究所

〒014-8601 秋田県大仙市大曲上栄町2-16
TEL 0187-63-9400 FAX 0187-63-9401
E-mail om-kyouken@edu.city.daisen.akita.jp